

「日常食からみた箸の意識」についての調査（第2報）

—東京都練馬区小竹小学校児童および保護者—

勝田 春子*

A Survey of People's Consciousness of Chopsticks in Daily Use (Part 2)

—Pupils and their Parents of Kotake

Elementary School, Nerima Ward, Tokyo—

Haruko Katsuta

要 旨 紀要29集では、小竹小学校^{注1)}の1年～6年生の児童に「日常食からみた箸の意識」について調査を行い考察をした。日常の食生活を通じて「箸」から食生活のいろいろな部分を知ることが出来た。児童を対象とした調査の結果、日常の食事に使い易い食器用具として、箸の48%、スプーンの37%、フォークの15%という数値を報告した。1987年、江頭マサエ氏^{注2)}の調査研究による食事に使い易い食器用具と比較すると、児童の場合は「箸」の使用者が極端に減少の傾向にあり場所、地域は異なるが、22年間に「箸」の使用者は半数に減ってきていることがわかった。「箸離れ」の傾向が顕著に表われている。「箸離れ」は単に食事様式の変化だけではなく、多くの社会的要因も加味されるものだと考えられ、社会の最小単位である家庭に焦点をあてた。

本稿では、児童の保護者を対象に正しい箸使いが行なわれているか、各家庭で正しい箸の持ち方、使い方を就学時期までに教えているのか、箸のマナー食事のマナーを正しく教えているのであろうか19の項目について調査し、その結果を報告する。

1 はじめに

本稿の調査目的は、食事をする際に欠かすことの出来ない「箸」について対象を小竹小学校の保護者の立場から展開をした。箸には、挟む、摘む、混る、ほぐす、切る、裂く、すくうというすばらしい機能があるにもかかわらず、時代の流れなのか、外来の道具を使うことが慣習化されて、スプーンやフォークの登場が多い。前稿の調査結果からみても箸離れの傾向にあるのは、箸食文化圏で長く培ってきた伝統文化を失っていくようで残念に思う。本稿では、児童の保護者に対象を移し、保護者側からみた家庭での食事の「箸」の使用状況を見てもらい、箸の

大切さを再認識してもらおうと思った。保護者自身の箸の持ち方、箸の使い方、箸の素材、購入先、購入するにあたり注意点、使用年数等を調査するとともに、家庭での躰が重要とされている食事の「きれい箸」についても調査を行い、家庭で使用されている「箸」の状況を知る機会を得た。食事というものは単に食べることはばかりでなく、家庭団らんを交えながら、最小限のマナーを守り、楽しく、おいしく食べることが一番である。「たかが箸、されど箸」という二本の棒ではあるが、手指の動きを刺激し、頭脳を活発にする箸は人格形成にも関与してくるという結果もみられている。この調査は練馬区の小さな地域ではあるが、保護者のご協力により、貴重な調査結果が得られたので、考察を交えながら報告をする。

* 本学助教授 調理学

2 調査方法

1. 調査対象

東京都練馬区立小竹小学校

1年生から6年生までの児童の保護者197名
(表1)

2. 調査時期

平成9年9月2日～9月6日

3. 調査にあたって

調査用紙は各クラスごとに配布し、児童用と保護者用をそれぞれ自宅に持ち帰り、直接記入回答方式とした。保護者には一世帯に一部配布出来るよう兄弟関係を調べたうえで下の学年の児童に配布した。

4. 調査項目

図1に表わす。

表1-1. 学年別対象保護数

学年\性別	男子の保護者	女子の保護者	合計
1年	22	20	42
2年	27	15	42
3年	20	15	35
4年	10	20	30
5年	12	14	26
6年	13	9	22
合計	104	98	197

(単位：人)

表1-2

学年\保護者の内訳	父親	母親	祖母	先生
1年	2	40	0	0
2年	1	37	0	4
3年	3	27	1	4
4年	1	28	0	1
5年	1	25	0	0
6年	1	21	0	0
合計	9	178	1	9

(単位：人)

「日常食からみた箸の意識」についての調査 保護者用調査用紙

適当と思われる方に○をつけてください。()はご記入してください。

記入者

1、父 2、母 3、祖父 4、祖母 5、その他

年代 1、20代 2、30代 3、40代 4、50代 5、60代 6、70代～

お子(お孫)さんの学年と性別

(例 5年、男)

() () ()

Q1. あなたは正しく箸が持てますか。

1、はい 2、いいえ

Q2. あなたは正しい箸づかいができますか。

1、はい 2、いいえ

Q3. あなたのお子さん(お孫さん)は正しく箸が持てますか。

1、はい 2、いいえ

()年男・女 1、はい 2、いいえ

()年男・女 1、はい 2、いいえ

()年男・女 1、はい 2、いいえ

Q4. あなたのお子さん(お孫さん)は正しい箸づかいができますか。

1、はい 2、いいえ

()年男・女 1、はい 2、いいえ

()年男・女 1、はい 2、いいえ

()年男・女 1、はい 2、いいえ

Q5. Q4で2と答えた方はいくつでも○をつけてください。

1、自分が正しく持てないので、きちんと指導できない

2、持ち方にはこだわらない、食べられればよい

3、機会があったら、正しい持ち方に直したい

Q6. 家族一人一人の箸を持っていますか。

1、はい 2、いいえ

Q7. 自分の指の長さにあった、箸の長さを知っていますか。

1、はい 2、いいえ

Q8. 家庭で現在使用している箸はどんな素材ですか。

1、木そのもの(竹、南天、桑、つげ、杉、黒たん、鉄ぼく、くるみ、その他)

2、木の下地に塗りもの(若狭、輪島、木曾、津軽、会津、藍胎、村上堆朱、その他)

- 3、プラスチック
- 4、その他（象牙、金属、角、石）

Q9. その箸は使いやすいですか。
1、はい 2、いいえ

Q10. 箸はどこで買いますか。
1、デパートの食器売り場
2、スーパーマーケット
3、100円ショップ 4、陶器屋・お茶屋
5、物産展で 6、旅行で

Q11. 箸を買うとき、どんな事に注意しますか。いくつでも○をつけて下さい。
1、使い良い長さ 2、色
3、模様 4、値段 5、素材 6、産地
7、その他（ ）

Q12. いくら位の箸を買いますか。
1、100～200円 2、200～300円
3、300～500円 4、500～1000円
5、1000円以上

Q13. どのような時に買いますか。
1、傷んだら 2、安売りの時 3、年の初め
4、記念日 5、紛失 6、旅行

Q14. 重い箸と軽い箸では、どちらが好きですか。
1、重い方が好き 2、軽い方が好き

Q15. 何年位使用しますか。
1、1年未満 2、1年～1年半 3、2年未満
4、2年以上3年 5、3年以上～

Q16. 家庭でよく割り箸を使いますか。

- 1、はい 2、いいえ

「はい」と答えたかた、いくつでも○を付けてください。

- ア、使いやすいので
- イ、お弁当についてくるので
- ウ、店屋ものについてくるので
- エ、来客が多いので
- オ、清潔なので

「いいえ」と答えたかた、いくつでも○を付けてください。

- ア、使いにくいので
- イ、資源のむだづかいなので
- ウ、お店のものは、買わない、取らないので

Q17. 「きれい箸」の意味を知っていますか。

- 1、はい 2、いいえ

知っているかたはいくつでも○を付けてください。

- 1、移り箸 2、なめ箸 3、こみ箸
- 4、さぐり箸 5、さし箸 6、くわえ箸
- 7、たたき箸 8、渡し箸 9、寄せ箸
- 10、掻き箸

Q18. お子（お孫）さんに箸のことで、注意したことが、ありますか。

- 1、はい 2、いいえ

Q19. どんなことで、注意しましたか。

()

お忙しいところ、ご協力ありがとうございます。

図1 「日常食からみた箸の意識」についての保護者用アンケート

3 調査結果および考察

今回は259名の児童に対し、197名の保護者（父親9名、母親178名、社会福祉法人錦華学園職員10名）を対象にした調査結果であり、年齢は20才代～50才代までと巾広く、圧倒的に母親が多く、特に30才代が一番多かった。

図2はQ1の調査結果である。

保護者自身が正しい箸の持ち方が出来るかどうかを調査した。197名中、171名（86.8%）の保護者は正しい持ち方ができ、26名（13.2%）は正しい持ち方ができないとの回答であった。「いいえ」と答えた1年生から5年生までの保護者は

5～20%であるのに対し、6年生の保護者は69%の人が正しく持てないとの回答である。父母の人数が少ない割に、正しい持ち方が出来ない人が多くいささか驚きを隠せない。これから先児童に影響がないことを願うとともに、正しい箸の持ち方をもう一度見なおしてほしいもの

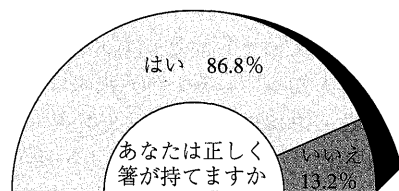


図2 Q1

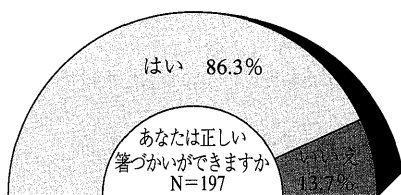


図3 Q2

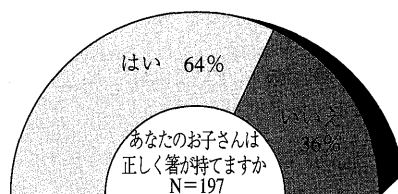


図4 Q3

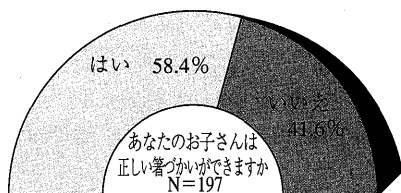


図5 Q4

である。正しい箸づかいはきれいな字を書く基本でもある。

図3はQ2の調査結果である。

保護者自身が正しい箸づかいが出来るかどうかを調査した。数値がQ1とほぼ同じで、正しい箸の持ち方と箸づかいは相互に関係しているので、正しい箸使いをもう一度見直してもらいたいものである。正しい箸使いの出来る保護者は86.3%であり、正しく使えない保護者は13.7%であった。児童の場合40%弱が正しい使い方ができなかったが、成長とともに正しい持ち方、正しい使い方を教えることにより、正しい使い方ができるようになってくると思われる。

図4はQ3、図5はQ4の調査結果である。

食事の際、保護者から見て児童が正しく箸を持ち、正しく箸が使えているかどうかである。64%は正しい持ち方ができているが、36%は正しい持ち方が出来ていないと思われる。前項の児童によるアンケート調査では、児童自身が正しい持ち方を知っていると答えたのは、81.9%であるから、約18%の児童は正しい持ち方ができていないということである。正しい箸づかいにおいても上記と同様に、保護者からみて、58.4%が正しい箸づかいをしているが、41.6%

表2. Q5.正しい箸づかいができない保護者 N=102

事柄\学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
1.自分が正しく持てないのできちんと指導できない	3	1	0	0	4	0	8
2.持ち方にはこだわらない食べればよい	0	1	0	0	3	0	4
3.機会があったら、正しい持ち方に直したい	20	17	15	15	16	7	90

(単位：人)

の児童は正しい箸づかいができていない。児童自身のアンケート調査では61.5%であるから、箸づかいが正しくないということは自分でも良くわかっていると思われる。又、1年から4年生までは正しい箸づかいはできない児童がかなりいると思われるので、食生活の中で、給食や家庭の食事の中で十分な時間をあたえたい。5年6年になると正しい箸づかいが出来てくると思われる。最近、字が下手という子が多く聞かれるが、箸の持ち方が一様でないことからいえると考えられる。

表2はQ5の調査結果である。N=102名中機会があったら、正しい持ち方に直したいという回答が最も多かった。幼稚園や保育園、小学校の低学年のうちに、できることなら就学時までに箸の正しい使い方を取り入れ、定期的に講習が行なわれるのが望ましい。2才位から見よう見まねで覚えるし、ちょっとのしぐさで正しい持ち方、正しい使い方ができると思われるし、子どもが初めて箸に興味をもつ2才位には正しく教えることが望ましい。市販されている「しつ

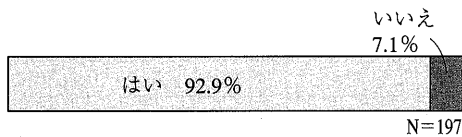


図6 Q6.家族1人1人の箸を持っていますか

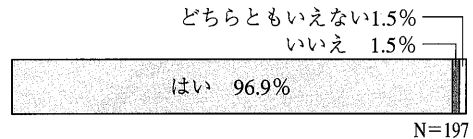


図9 Q9.その箸は使いやすいですか



図7 Q7.自分の指の長さにあった箸の長さを知っていますか

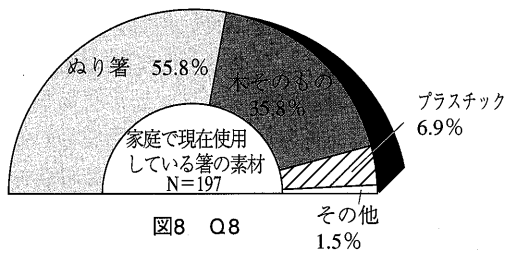


図8 Q8

けばし」を使っても良いのではないか。

図6はQ6の調査結果で、家族1人1人の箸を持っていますかという質問である。家庭で使用されている箸の93%は個人の食事用具として、お椀、お茶碗とともにはっきりと分けられていることがわかった。使い易い箸については本学紀要29集を参照していただきたい。「いいえ」と回答した家庭では、大人も児童も同じ長さの箸を使用していると思われる。体の成長とともに手の大きさ、足の大きさも変化してくるので、手に合った箸の長さを選んでほしい。

図7はQ7の調査結果であり、箸を買い求める場合、自分の手の指の長さ^{注3)}を知っているかを調査した。68.5%の保護者は手の指の長さとして箸の相互関係を知らなかった。手にあった箸の長さは一咫半がもっとも使いやすい。購入する場合は、自分の手の指（親指と人差指を直角に開いた間の長さ^{いちぢた}）の1.5倍の長さのものを買い求めてほしい。

図8はQ8の調査結果である。各家庭においてどのような素材の箸を使用しているのかを調査した。保護者の家族全員が含まれているので複数回答とした。

木の下地で塗られたものは55.8%と多く輪島塗りが一番多かった。塗り箸については、本学紀要22集を参照してほしい。輪島塗りの箸は毎日の食事で、すべての条件（見ため、使い勝手、値段）が満たされ、消費者から支持されていると思われる。木そのものの箸は35.8%、プラスチック箸は6.9%で小さな子供用と思われる。その他は1.5%で象牙や角の使用であった。

日常使う箸はケの箸といい、性別、年齢にあった材質、色、柄等が異なり、個人専用の食事用具として用いられる。ケの箸は神との共食はないので、「天太先細」の片口箸が用いられる。日本には古くから箸は、神や使用している人の霊が宿るといわれ、箸による迷信やことわざも多数存在している。

図9はQ9の調査結果で、保護者が使用している箸の使い勝手を調査したものである。

保護者が現在使用している箸のうち96.9%の人が使い易い、1.5%の人は使いにくい、どちらともいえないという人も1.5%の数値であった。どちらともいえない人は、箸の太さや角形、丸形の手感触、箸先のミゾが口内の感触のさまたげになったりすることが記載されていた。

図10はQ10の調査結果である。箸はどこで購入しますか。家族の一人一人の箸を購入するため場所等も違っていると思われ、複数回答とした。スーパーマーケットでの購入32.8%、デパート28.5%、100円ショップ14.5%、

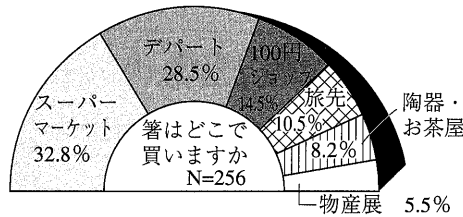


図10 Q10

旅行先でおみやげとして購入10.5%、瀬戸もの、陶器店、お茶屋さんで購入するが8.2%、物産展が5.5%であった。スーパーで購入する人は、思いついたらすぐ購入することができ、日常の買物と並行して買える。又、一膳ずつ包装されているので、気安く選べて買える利点があると考えられる。デパートでの購入では、生産地の高級品から特売用のもの、長さ、形状、模様の種類、作家もの等多種類にわたってそろえられ、「お箸を購入するため」という強い目的意識も感じられる。100円ショップでは取りあえず間に合せようという一時的に必要となり購入することが多い。陶器市等のバーゲン会場で売られていることもあり、掘り出し物があったならば購入しようと思われる。旅行先では、お箸に関心のある人が土産や記念として買い求めていると考えられ、長寿箸、延命箸、招福箸、開運箸、夫婦箸等を購入していると思われる。物産展での購入は多岐にわたる物産があるため購入しにくいと考えられる。その他、キャラクターショップや生協で購入する保護者も見受けられ、改めていろいろな場所で購入されていることがわかった。

表3はQ11の調査結果である。

お箸を購入する際の配慮すべき点である。複数回答とした。一番配慮することは使い良い長さ29%、二番目は素材20.6%、三番目は値段16.8%、四番目は色で選ぶ16%、五番目は模様の14.8%、六番目は産地にこだわる、その他の順であった。一番多くのパーセンテージを示めた使い良い長さについては、前項で述べてある

表3. Q11.箸を買うとき、どんなことに注意しますか。

箸を買うときの注意\学年別	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計	%
1.使いよい長さ	35	36	30	26	26	18	171	29.0
2.素材	29	26	21	17	15	13	121	20.6
3.値段	24	22	15	16	10	12	99	16.8
4.色	21	16	17	18	11	11	94	16.0
5.模様	23	17	14	15	9	9	87	14.8
6.産地	0	1	2	0	0	1	4	0.8
7.その他 (太さ、重さ、すべり止め等)	3	2	3	0	4	0	12	2.0

(単位:人)

ので省略する。

四番目の色では、男性は主に黒や茶系の木そのもの(唐木箸)を選ぶのに対し、女性は色彩豊かな赤を基調とした箸を好む傾向があることがわかった。最近ではファッショナブルな色彩のものも多く出回り、模様も画一的なものではなく、モダンでファッション性も感じられ、食卓に一段と花をそえている。

図11はQ12の調査結果で、いくら位の箸を買いますかの質問である。値段的には500~1000円位までの箸を買う人が一番多く31%を占める。二番目は300~500円程度のもので28%、三番目は200円~300円が18%で1000円以上の箸を購入する人は14%と意外と少ない。100~200円の箸を購入する人も9%であった。箸の値段もピンからきりまでであるが、安い箸を時々買い替えるか、デパート等で売られている作家ものの箸やコレクション的な高価な箸を長く使用していくのかは個人の意識によるところが多い。高価な箸はそれなりの加工・技術がほどこされ、大切に扱えば自分の手になじみ、愛着もより一層わくので丁寧に扱い、長い年月使用できる。使った年数、回数で計算すると僅かなものであると、毎日の食事には良いものを使用したい。

図12はQ13の調査結果で、どのような時に箸を買いますか。毎日使う箸は使用頻度と取扱いによって大きく左右され、個人差があると思われる。小竹小学校の保護者の場合、傷んでから買い替える70%、年の初めに新しい箸を購入す

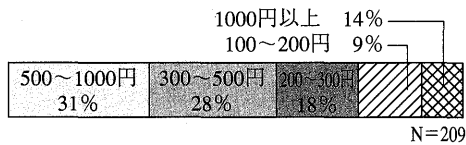


図11. Q12.いくら位の箸を買いますか

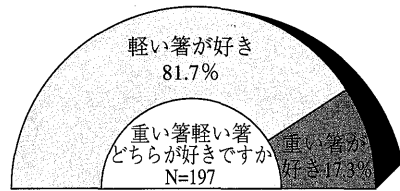


図13 Q14

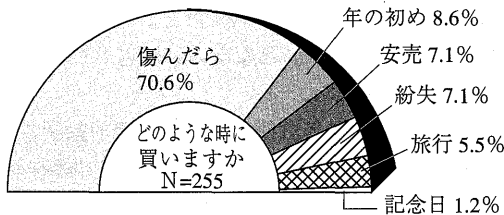


図12 Q13



図14 Q15.何年使用しますか

る人8.5%、安売、紛失が7.1%ずつ、旅先で購入5.5%、誕生日、結婚記念日は1.2%だった。傷んでから買う場合、塗箸では箸先から下の木地が見えてきたり、扱いによる塗りがはがれてきたりした時、手に持つ感触が悪く異和感が生じた場合と思われる。

年の初めに新しい箸を購入する人は、縁起や節目をつけるためと思われる。安売と紛失も意外と多く、流いカゴからの紛失や引き出しの中での紛失が意外と多い。記念日は意外であったが、8月4日（ハシの日）であるとか、誕生日に買い求めることは、成長とともに手の指の長さに合った箸を買い求めることができ、購入日が一目瞭然である。

図13はQ14の調査結果である。箸の重さについての調査であり、小竹小学校の保護者の場合81.7%の人が軽い箸を好むのに対し、17.3%の人は重い箸を好むという結果だった。軽い箸を好む人が圧倒的である。箸の好まれる重さについては、秋岡芳夫氏^{注4)}が和食器考（食品にみる食文化の違い）の中で述べられている。各々地方により箸の重さの好みがあることがわかった。

『東北には東北の箸の目方のきまりがあるの

である。そして関西には関西の箸の重さの好みがある。羽根のように軽い箸が関西好みで、水に沈むぐらいの重い箸が東北好みだ。同様な箸の重さの好みは関東にもあるし、北九州にもある。だから全国ネットで箸を販売している箸の店では、産地から箸を仕入れるさい、地域別な箸の目方のウェイトゾーン（売れ筋の重さの中）を記入したチェックリストで地域別に仕入れ、地域別に販売して客のニーズに応える努力を続けている。』ちなみに東北地方で好まれる箸の重さは約23gであり、関西地方で好まれる箸の重さは約12gで関東地方では軽い箸が好まれる傾向にある。

図14はQ15の調査結果で、箸の使用年数について調査した。日常使用される箸は、唐木箸もしくは塗箸と思われるが、小竹小学校の保護者の場合、1年~1年半の使用は30%、1年未満が20.8%で回答者（197名）の半数は1年未満~1年半とひじょうに短い使用年数だった。長期間に渡って使用する人は、3年以上で手にもなじみ、愛着もわくであろう。例え箸といえども物を大切にする気持は環境問題にもかかわってくるし、神々とのつながりもあると思えばより大切に扱いたい。回答者の中に、象牙の箸を20年以上使用している保護者もお敬意を表わす。

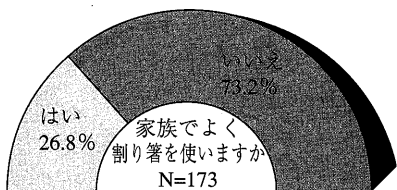


図15 Q16

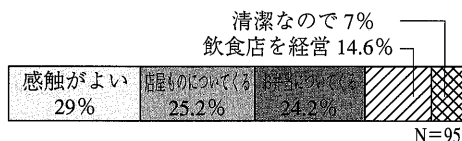


図16-1 割り箸をよく使用する理由

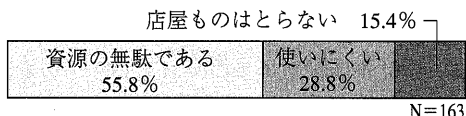


図16-2 割り箸を使用しない理由

図15はQ16の調査結果である。

家庭での割り箸使用の状況を調査したものである。家庭でよく使う「はい」と回答したのはN=197のうち26.8%、「いいえ」と回答したのは73.2%で割り箸を使わない家庭が圧倒的に多かった。割り箸の発生は本学紀要21集に記載したが江戸時代中期、下町で登場し、鰻屋に竹の引裂箸が使用されて、全国に広まったと言われ、割り箸は驚異的に発達し、素材、形状、長さにより、丁六、小判、元禄、利久、天削等の割り箸があり、それぞれ用途が異なり、ハレの日とケの日を兼ねた箸である。

図16は割り箸をよく使用する理由をあげたものである。よく使用するN=95と回答した29%の保護者は、塗り箸とまったく異なった感触で使いやすいと思われる。25.2%の人は寿司、中華物、麺類、丼物等についてくる割り箸をそのまま使用している。24.2%の人は、お弁当専門店、コンビニ、スーパー、デパート等のお弁当に割り箸がついてくるので使用しているとの回答を得

た。又、来客が多い家庭や飲食店を営んでいる家庭も割り箸を14.6%も使用している。清潔なので使用すると回答した保護者は7%だった。割り箸の特徴は、機能的で清潔、衛生的であることが利点であると思われる。

図16-2は家庭では割り箸を使用しないと回答したN=163の55.8%は資源の無駄をあげている。割り箸が使いにくいと回答した28.8%はお弁当に入っている丁六や小判の割り箸をさしている。店屋ものは買わない、取らないと回答した保護者は15.4%であった。

割り箸は資源の無駄使いと環境問題で論議されてから久しい。だが、割り箸はもともと吉野杉の樽、桶の余材や建築材の余材でつくられたものであるので木材の無駄使いと言われるのは論外であるが、実際のところ、割り箸メーカーでは余材の再利用に人件費がかかるため、正木から生産する方法をとり、余材を使わなかったり、中国、インドネシア等から現地生産を大量に行っているのが現状である。環境保護問題としてマスコミの非難をあげている。日本の森林の現状は、過疎化と不況のため人手がたりず間伐が思うように出来ず、輸送面や人件費を考えると、現状の形を取らざるを得ない。パブル崩壊後は資源の大切さを知り、利用者の意識も変わりつつあると思われる。

図17はQ17の調査結果で、「きらい箸」の意味について調査した。「きらい箸」の意味を知っている保護者は58.5%。知らないと答えた保護者は41.5%であり、かなりの保護者が知らないことがわかった。

図18は比較的よく使われている「きらい箸」である。「きらい箸」とは他人が忌み嫌う箸使いをいい、日本の食事作法の大切な約束ごとになっている。「箸に始まり、箸に終る」と言われているように、箸の取り方から置き方、しまい方まで多くの作法を知らねばならない。「きらい箸」という名称は知らないまでも、箸を使用しているものの常識として、知っておいてほし

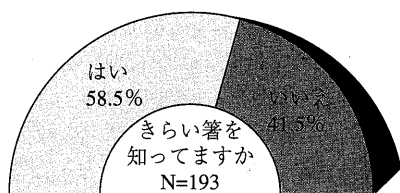


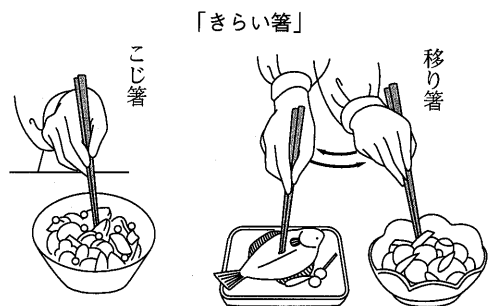
図17 Q17

種類	方法
迷い箸	どれをとろうかと迷う
移り箸	とりかけてほかのものに替える
探り箸	汁物などかきまぜて中身を探る
かき箸	茶わんの縁を口にあてがい箸でかきこむ
寄せ箸	箸で器を引きよせる
刺し箸	箸で突き刺す
横箸	2本そろえてスプーンのようにすくう
涙箸	箸先から汁をたらす
込み箸	箸で口に押し込む
ねぶり箸	箸をなめる
叩き箸	器を叩く
握り箸	拳で握る。攻撃の意味

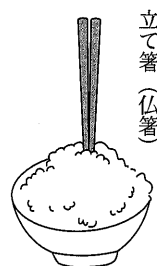
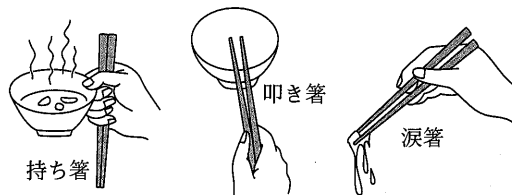
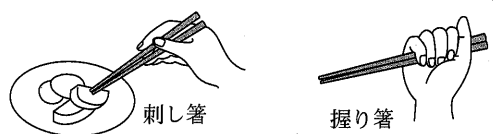
図18 箸のタブー「きらい箸」

い。本項の調査では「きらい箸」という言葉は知らないが、日常の食事動作の中で、無作法という言葉として複数回答とした。良く知っている「きらい箸」を数値の多い順に並べると、①くわえ箸、②なめ箸、③さぐり箸、④移り箸、⑤さし箸、⑥渡し箸、⑦寄せ箸、⑧たたき箸、⑨掻き箸、⑩こみ箸の順であった。「きらい箸」は70種にも及び、食事中無意識のうちに「きらい箸」をしていることが多く、気をつけたいものである。

図19はQ18の調査結果で、子供に「箸」のことで注意を促したかどうかを調査したものであ



あれこれと続けてお菜を食べる



る。

「はい」と答えた保護者は88.7%で何らかの注意をしている。表18は注意した項目を学年別にまとめた。学年が小さいほど、基本的な持ち方や作法も素直に受けられるが、学年が大きくなるに従いむずかしい状況である。

「いいえ」と答えた保護者は11.3%で、家庭では何の注意もされていない。食事は楽しくおいしくが一番であるが、「親しき中にも礼儀あり」が守られてこそ、食事の楽しみが生活の楽しみにもつながっていくであろうと考えられ、毎日の何げない食事作法の継続は、将来子供にとって意味のあることと思われる。

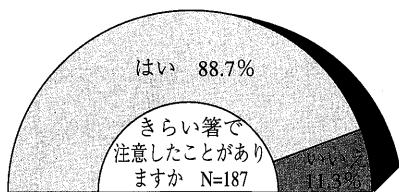


図19 Q18

「箸」の注意に限らず、生活面全体についても注意は必要と思われる。何故なら、子供たちは善・悪がよくわかっていないので教えてあげるのが親の務めである。

図20はQ19の「きれい箸」で注意をしましたかかの調査結果である。この項では日常食で、特に目に余った「きれい箸」をあげてもらった。複数回答の結果212名中87名(41%)は箸の持ち方の違いをあげている。特に一年、二年生に

多いので、機会をつくって直してほしいし、根気よく教え続けてほしい。次に使い方がちがう、212名中26名(12.2%)が使い方を上げている。これは正しい箸の持ち方ができないためである。三番目は用い箸(ご飯に箸をたてる)以下わたし箸や、くわえ箸、なめ箸、つつき箸などで図18を参照してもらいたい。

家庭での食事は楽しさの余り、子供たちがふざけて食事をする傾向もみられるが、保護者は時折子供に、注意を促し、よりよい食事マナーが身につくようにしてほしい。やがて、それらのマナーは生活全般のマナーとして身につくことと思われる。

3 おわりに

本稿では小竹小学校の保護者を対象に「日常食からみた箸の意識」について調査をしてきた

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
1.持ち方	21	22	18	13	7	6	87
2.使い方が違う	6	5	7	4	2	2	26
3.茶碗をたたく	2						2
4.さぐる	2		1			2	5
5.おもちゃにする	1						1
6.かきこむ	1	1					2
7.ふり回す	1						1
8.くわえる	5	3			1		9
9.わたし(わたし箸)	5	1			6		12
10.ふざける(ふりまわす)	2	1	1				4
11.なめる	3			1			4
12.かむ	1						1
13.つつく	5		1	1			7
14.用い箸(ごはんにたてる)	6	1	2	1	5		15
15.おき方	1			1			2
16.こぼす	1						1
17.箸先を人に向ける		1	1				2
18.ものをとるとき箸をもったまま		1					1
19.先をそろえてから使うように	1						1
20.礼儀作用		1					1
21.箸のもつ位置		2	1	1			4
22.よせ箸		1					1
23.迷い箸		1	1				2
24.クロス			1		2		3
25.さし箸		1	1	1			3
26.あそんで		1	1				2
27.手で食べる(箸をもって食べなさい)			1				1
28.箸をテーブルの下に落とす			1				1
29.骨のはずし方			1		1		2
30.中指をそろえる				1			1
31.箸を外側に向けて					1		1
32.きれい箸(内容不明)	1	2		1		3	7

図20 きれい箸の分類
Q.19 「きれい箸」で注意をしましたか。

が、(1) 箸づかいにおいては、保護者の85%は正しい箸づかいが出来ているのに比べ、保護者から見た児童の36%は箸の持ち方が正しくない。従って箸づかいも約42%の児童は正しい箸づかいが出来ないことがわかった。2才頃からはスプーンを使って一人でも食事ができ、5~6才になると箸の持ち方もほぼ完成してくる。箸が使いにくい児童は、フォークやスプーンを使いつづけ、箸ばなれをしていくと思われる。食事作法は家庭で家族と一緒に取りながら身に付けていくことが望ましいが、社会事情（共働き、残業、塾）で個食をせざるを得ない状況であるため、基本となる食事作法（箸づかいや食べ方等）は幼少のうちに習慣づけ、就学時期までには身につくようにしたいものである。正しい箸づかいは、正しい持ち方ができれば、自然に指も動いてくれるものである。

(2) 箸の一般的調査では、日常の食事では思いがけない調査項目であったかもしれないが、箸の素材、使い良さ、購入方法や使用年数、箸の値段を知ることができたことは、とても有意であり、保護者にとっても箸を見直す良い機会であったかと思われる。

(3) 箸の重量についての調査では、小竹小学校の保護者は軽い箸を好む傾向にあると思われた。出身地や個人の好みで軽い箸を好む人や重い箸を好む人がいるので一概には言えないので、箸の重量については今後の研究課題の一つにしていきたい。

(4) 割箸の使用では、環境問題との関わりからか思っていたよりも利用者が少なく、外食や中食（店で購入して、自宅で食べる）をしない家庭が意外と多いように思われた。

(5) きらい箸については、箸のマナーとして、児童、保護者にも知ってもらいたいし、児童には、給食時間をさいて、見直す機会、学ぶ機会をあたえてほしい。家庭では保護者もなるべく注意を促し、食事マナーの向上に気配りをしてもらいたいと願っている。

最近「箸」との関わりとして印象にのこったことが三件ある。一件目は、1998年（平成10年）

10月28日付の朝日新聞朝刊によるもので、公立の小中学校給食に、さきわれスプーン（本学紀要22集）の使用が半数を切ったことが、文部省より発表された。1997年の食器具使用状況調査でわかったことであるが、先割れスプーンは子供たちの「犬食い」の一因と指摘されており、87年の75.1%から10年間で45%までに減ってきた。調査は87年に始まり、97年5月時点で4回調査が行なわれている。遅まきではあるが、50年にわたって使用されてきたさきわれスプーンの廃止は喜しいことであり、学校給食における食事作法も改善され、家庭の食事作法にも良い影響をあたえるものと思われる。

二件目は平成11年8月13日付の朝日新聞の「天声人語」で、鉛筆の衰退について書かれており、『鉛筆のあの長さは、人の手の寸法から割り出されたものらしく、太さも経験を重ねた結果、それに六角形だから持ちやすく、転がらない。「文具の研究」中公文庫より、つまりすこぶる人間的、人間的存在がまた一つ衰えていく』と書かれた中で、鉛筆のもち方と箸のもち方は同じと述べてきたが、箸が正しくもてると鉛筆も正しくもて、美しい文字が書けると箸との関連性も述べた。OA機器の発達や文具の進歩（シャープペン、ボールペン）で鉛筆の需要がなくなってきたことは残念である。鉛筆を削ることもなくなり、小刀なども使う機会がなくなるであろう。鉛筆離れは箸離れとも関連があると考えられ、研究テーマとして考えて行きたい。

三件目は、一流会社の新入社員教育に於て、食事作法、特に箸の持ち方を重視しているという。なぜなら研修中に食事をとることで、家庭内の食生活状況が一目瞭然にわかるということらしい。箸づかいや食事のマナーが守られている人は、家庭の躰がきちんとなされ、コミュニケーションもうまくとれているということらしい。「たかが箸、されど箸」といわれている二本の棒に歴史の重みが加わり、日本の食文化とともに歩んできた「箸」を大切にしたい。以上「日常食からみた箸の意識」についての調査の稿を閉じるが、今後は本稿のアンケート調査の

中からテーマを見つけて研究していきたいと思っている。本研究を行うにあたり、前練馬区立小竹小学校校長、松本勝士先生をはじめ、練馬区立小竹小学校の教職員の先生方と調査にご協力いただいた練馬区立小竹小学校の保護者、並びに児童の皆様にご心より感謝の意をあらわします。

- 注1) 練馬区小竹町2-6-7
- 注2) 江頭マサエ はしのおはなし (1985)
- 注3) 本学紀要29集 P.6図9
- 注4) 生活デザイナー 食事研究家

引用文献

- 1) 江頭マサエ はしのおはなし P41 (1985)
- 2) 秋岡芳夫 VASTA 食文化を考える P.26 (1992)
- 3) 朝日新聞 1998.10.28 朝刊
- 4) 朝日新聞 1999.8.13 朝刊 天声人語より
- 5) 一色八郎 著 P.136、P.137 (1987)

参考文献

- 1) 一色八郎 著 保育社 (1991)
- 2) 馬場啓一 和の作法 夏目書房 (1995)
- 3) 石川寛子 食生活と文化 弘学出版 (1989)
- 4) 辻 創 父親のしつけ実践 草思社 (1998)
- 5) 小野重和 和風たべかた事典 農文協 (1997)
- 6) 笹沢左保 しつけとはこんなにやさしいものか 海竜社 (1996)
- 7) 中野孝次 現代人の作法 岩波新書 (1997)
- 8) 一色八郎 日本人はなぜ箸を使うか 大月書店 (1987)
- 9) 本田総一郎 箸の本 柴田書店 (1985)
- 10) 勝田春子 文化女子大学研究紀要 21集 (1990)
- 11) 勝田春子 文化女子大学研究紀要 22集 (1991)
- 12) 勝田春子 文化女子大学研究紀要 29集 (1998)
- 13) 秋岡芳夫 食器の買い方・選び方 新潮社 (1987)
- 14) 阿部正路 箸のはなし ほるぷ出版 (1993)